

上向嶋2号墳の評価―出土品再整理報告―

岩原 剛

1 はじめに

上向嶋2号墳は、豊橋市石巻平野町字上向嶋に所在した古墳である。現地は豊橋市北部の山地で、付近は県内でも指折りの古墳分布地帯である。過去に行われた発掘調査により東海地方では数少ない毛彫馬具のセットが出土したほか、鉄製馬具や鉄製武器、須恵器などが出土した。

本稿ではその出土品の重要性を鑑み、再調査を行った成果を報告するものである。合わせて、古墳時代終末期における上向嶋2号墳の歴史的な意義についても考察する。

2 上向嶋2号墳の発掘調査成果

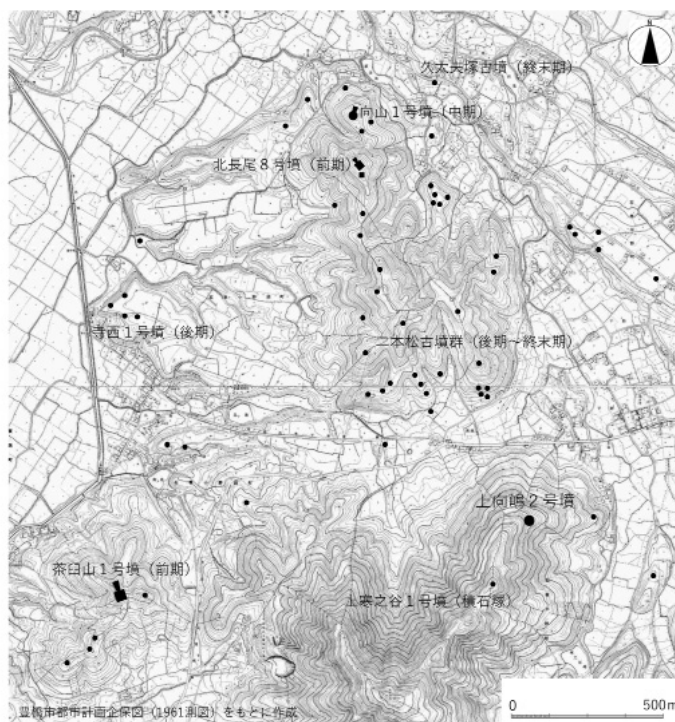
(1) 位置と周辺環境 (第1図)

上向嶋2号墳は、標高259mの日名倉山から北東方向に延びた尾根がさらに東に折れて下っていく尾根線のすぐ南側の斜面、標高120mほどの場所に所在している。南西に200mほど離れた尾根上には積石塚古墳の上寒之谷1号墳(6世紀前葉)があり、東に150mほど下ったところには上向嶋1号墳が所在する。いずれにせよ、他の古墳とは離れた独立墳的な様相を呈する古墳である。

日名倉山の北側には、標高103mを最高所とする低丘陵があり、北長尾・下振・向坪などの支群で構成された後期から終末期の二本松古墳群が所在するほか、周辺の段丘上には穂国造の墓域と推定される馬越長火塚古墳群(6世紀末～7世紀前葉)や寺西1号墳(6世紀後葉)、久太夫塚古墳(7世紀前葉)などの有力墳が存在する。

(2) 発掘調査の経緯

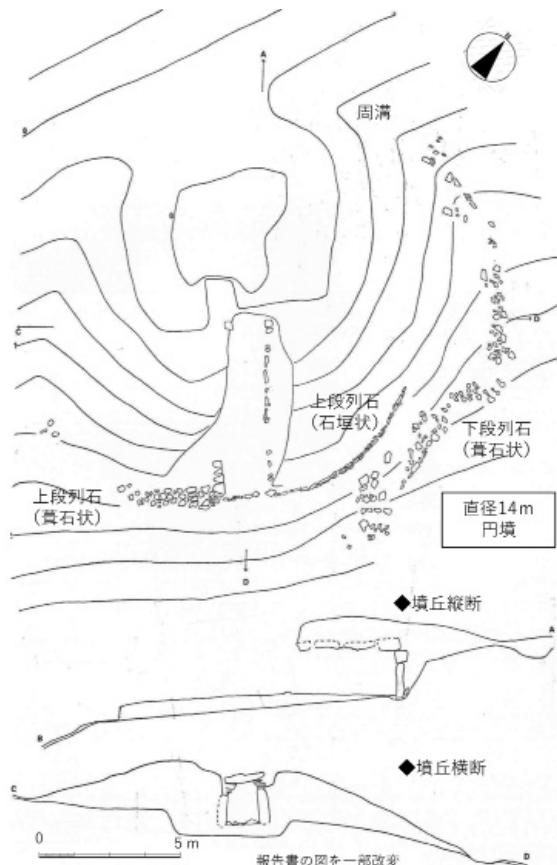
上向嶋2号墳は、愛知県営開拓パイロット事業(農地整備事業)に伴い二本松古墳群とともに発掘調査された。事業全体にかかる調査は昭和44年12月から着手し、上向嶋2号墳は昭和46年3月28日から8月10日に調査された。調査は愛知県の依頼で愛知県営開拓パイロット事業石巻地区埋蔵文化財調査団が実施し、調査担当は芳賀陽(日本考古学協会・当時)である。



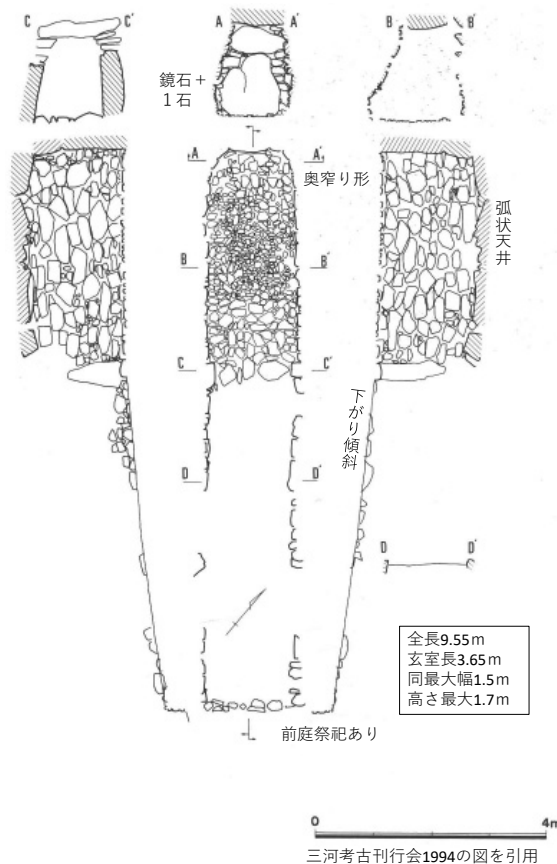
(3) 墳丘 (第2図)

古墳は、直径14m～16.5mの円墳である。斜面にあるため残存する墳丘の高さは計測場所により異なり、南側の石室入口付近で3.75m、北側の墳丘背後で1.2mである。

第1図 上向嶋2号墳の位置



第2図 墳丘



第3図 横穴式石室

墳丘の背後には幅1mほどの周溝が巡り、周辺の斜面と墳丘の間を区画している。また墳丘上には上下2段の列石があり、上段列石は墳丘の南側に弧状に設置され、石室を挟んで西側は葺石状の斜面を呈するのに対し、東側は2～3段に積んだ外護列石状となる。さらに墳丘の東側一帯は下段の列石が設けられており、崩落による乱れが認められてはいるが、施工方法は葺石状である。墳丘縦断の旧地形ラインからも読み取れるように、全体的に地形が南西下りの傾斜になっているため下段列石は土留め措置と外装を意識してのものと考えられる。

従来は上段列石から背後の周溝の内側を墳丘範囲と見なして直径14mとしていたが、下段列石を含めれば東西は16.5mを測り、南北の墳丘範囲もさらに広がる可能性がある。

(4) 横穴式石室 (第3図)

南東に開口する横穴式石室で、開口方位はS-40°-Eである。石室の各部位の呼称については、奥壁から入口を見たときの左右で説明する。

横穴式石室は、立柱石により室内を区分する擬似両袖形である。入口から立柱石の間を羨道、そこから奥を玄室とする。羨道の長さが著しく長いこと、羨道側壁の残存状況が悪いことから、途中にさらにもう1対の立柱石が存在した可能性が高いが、現状では確認できない。使用石材は、側壁がチャートおよび輝緑岩で、立柱石はチャート。奥壁は下段の鏡石が石灰岩で上段はチャート。4枚架構された天井石は石灰岩である。部位により石灰岩を選択していることが分かる。

なお、石室規模の計測値は下記のとおりである。

石室全長 9.55m

玄室 長さ 3.65m

幅 最大(玄門付近) 1.5m

奥壁 1.0m

高さ 玄室中央 1.7m

奥壁 1.55m

羨道 長さ 5.9m

幅 中央 1.45m 入口 1.5m

石室の平面形は、羨道と玄室の境界に明確な屈曲を伴わず、側壁が並行して伸びながら羨道と玄室が一連となるもので、玄室の奥で急に幅を狭めた奥窄まり形である。天井は玄室しか残存しておらず、縦断面形はわずかに緩やかな弧状を呈している。また床面は玄室のみに敷石を設けるほか、玄門立柱の間には大きめの石を並べてしきみ石としている。床面は玄室がほぼ水平であるのに対し、羨道は緩やかな下がり傾斜となる。

さらに詳細にみると、まず羨道の前端は上段列石に連続し、側壁に立柱石を設けた様子はない。そのため石室入口付近は床面が平坦な前庭であったと考えられる。閉塞石は遺存していない。羨道側壁は玄門の右手前で3段程度残る。玄室に比べて石材は全体に小ぶりなようである。

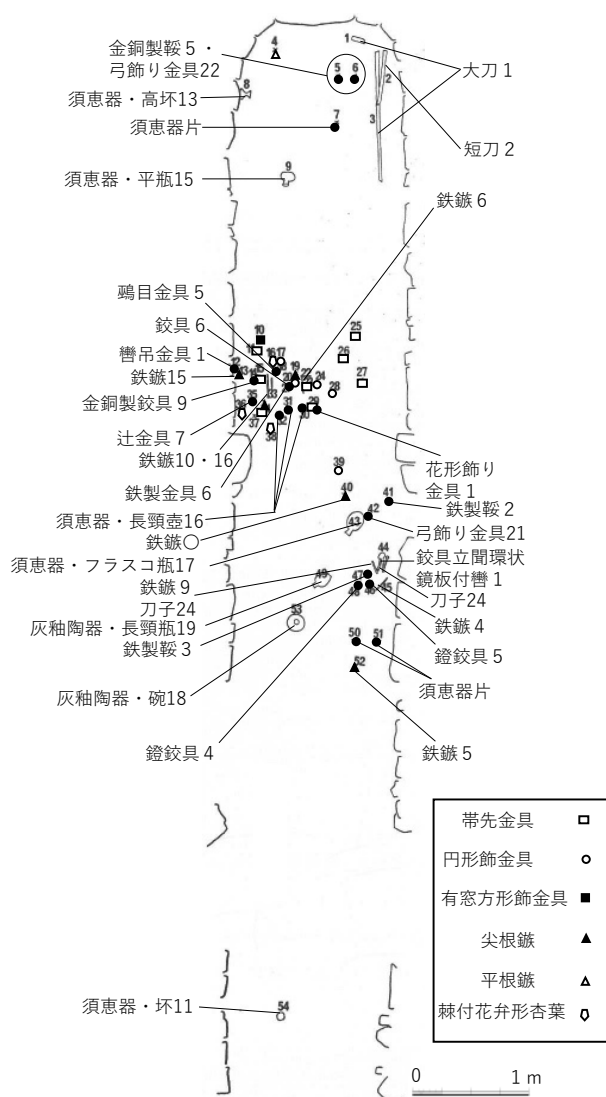
玄室は、側壁に30～60cmほどの石材を多用し、左側壁に比べて右側壁の方が大きめの石材を使用する。目地は横方向によく通り、他の擬似両袖形石室と同様に立柱の上で明瞭な横目地が観察できる。奥壁は下段に大型の鏡石を置きさらに一段石材を横置きにしており、側壁や天井石との間に小石材を詰めている。鏡石の高さは玄門立柱の上から続く目地にそろう。床面には一面に敷石が敷かれており、立柱石から1mほどは石灰岩、そこから奥は輝緑岩が使用されている。報告者は石灰岩が1次葬送、輝緑岩が2次葬送の敷き直しのものと推定しているが、両敷石の高さは同じで石灰岩の敷石の上に輝緑岩の敷石が載るわけではない。

なお、石室は南東方向に開口するコ字形の掘方に設けられる。墳丘縦断面図から掘方の床面が全体に入口方向に向かって傾斜していることが分かり、床面はさらに盛土を施した上で形成している。

(5) 遺物の出土状況 (第4図)

石室内 毛彫馬具は、玄室の玄門奥の右側壁際にまとめられており、繋につながれた一連の馬具であったと考える。この中には鉄鎌や鷓目金具(第9図5)も含まれるが、刀身は存在しない。また鉄製馬具は、羨道の玄門から手前1mほどまでの左側壁際に集中して置かれていた。このほか、奥壁前の左側壁に沿って大刀・短刀・弓飾り金具(両頭金具)があるほか、毛彫馬具の鞍金具2点もここから出土している。須恵器は奥壁前と中央付近に高坏(第5図13)と平瓶(同15)が、毛彫馬具付近から長頸壺(同16)が、鉄製馬具の近くにフラスコ瓶(同17)が出土したほか、石室入口近くから坏(同11)が出土している。

石室外 石室入口の上段列石上の埋土、およびそこから下段列石の南端にかけて破碎された状態の須恵器・土師器が出土しており、墓前儀礼に伴うものだろう。帰属時期はおおむね石室内と一致しており、複数回の儀礼によって残されたものと理解できる。



第4図 副葬品出土状況

3 出土品について

(1) 石室内出土土器 (第5図、表1)

石室内から出土した土器には、須恵器と土師器、灰釉陶器がある。須恵器はすべて湖西窯産であり、灰釉陶器は後世の石室内利用で使用されたものである。

須恵器・坏蓋 (1) 天井部と体部の間を1条の沈線で区画する。形態は9に近く、蓋の数からすれば坏としても良いものである。

須恵器・蓋 (2～8) いずれも天井に摘みを持ち、内面には返りがある蓋である。摘みは2・3が扁平で中央がわずかにくぼむ凹状、4が宝珠状、5～7は扁平な宝珠状である。器形は全体に扁平なものが多いが、8は器高が高く他よりも古い形態である。

須恵器・坏 (9～12) 9は坏蓋1と形状が似るもので、器形は深く底部は丸みを帯びる。10は底部と体部の境界が緩やかに屈曲し、体部は外上方にまっすぐ伸びるが口縁端部をわずかに内湾させる。底部はわずかに丸みを帯びる。11・12は底部と体部の境界が強く屈曲し、体部から口縁部にかけて外反する。底部は回転ヘラ削りで11は底部の外周をさらになでている。

須恵器・高坏 (13・14) 13は小型高坏で、奥壁手前の右側壁際から出土した。坏部は箱形で、脚部は透かしが無く端部近くで緩やかに外湾し、端部は面を持つ。14は、報告書では後円部が欠損した実測図が掲載されているが、収納された同じ袋に口縁部片が存在したことから今回、復元的に図を作成した。浅く湾曲した坏部は口縁端部内面に面を持つ。脚端部は折り曲げて端部をとがらせ、端部外面は面を持つ。

須恵器・平瓶 (15) 肩の張った体部にラッパ状に開く口頸部を接合する。体部外面に沈線は見られないが、内面の口縁部直下に1条の沈線を持つ。外面には自然釉が認められる。

須恵器・長頸壺 (16) ラッパ状に開く長い口頸部で、口縁部付近に特別な造作が見られないことから長頸壺とした。外面から内面の上部に自然釉が認められる。

須恵器・フラスコ瓶 (17) 球形に近い体部に長い口頸部を接合したものである。口縁部の端は段のなごりが認められるが、わずかに内湾させて端部は面とならずに丸くおさめる。体部はやや歪みが認められ、風船技法で成形した後に塞いだ痕跡が明瞭に観察できる。体部の数か所が破損しており、人為的な打撃痕も含まれると思われる。器表の全体に自然釉が厚く付着する。

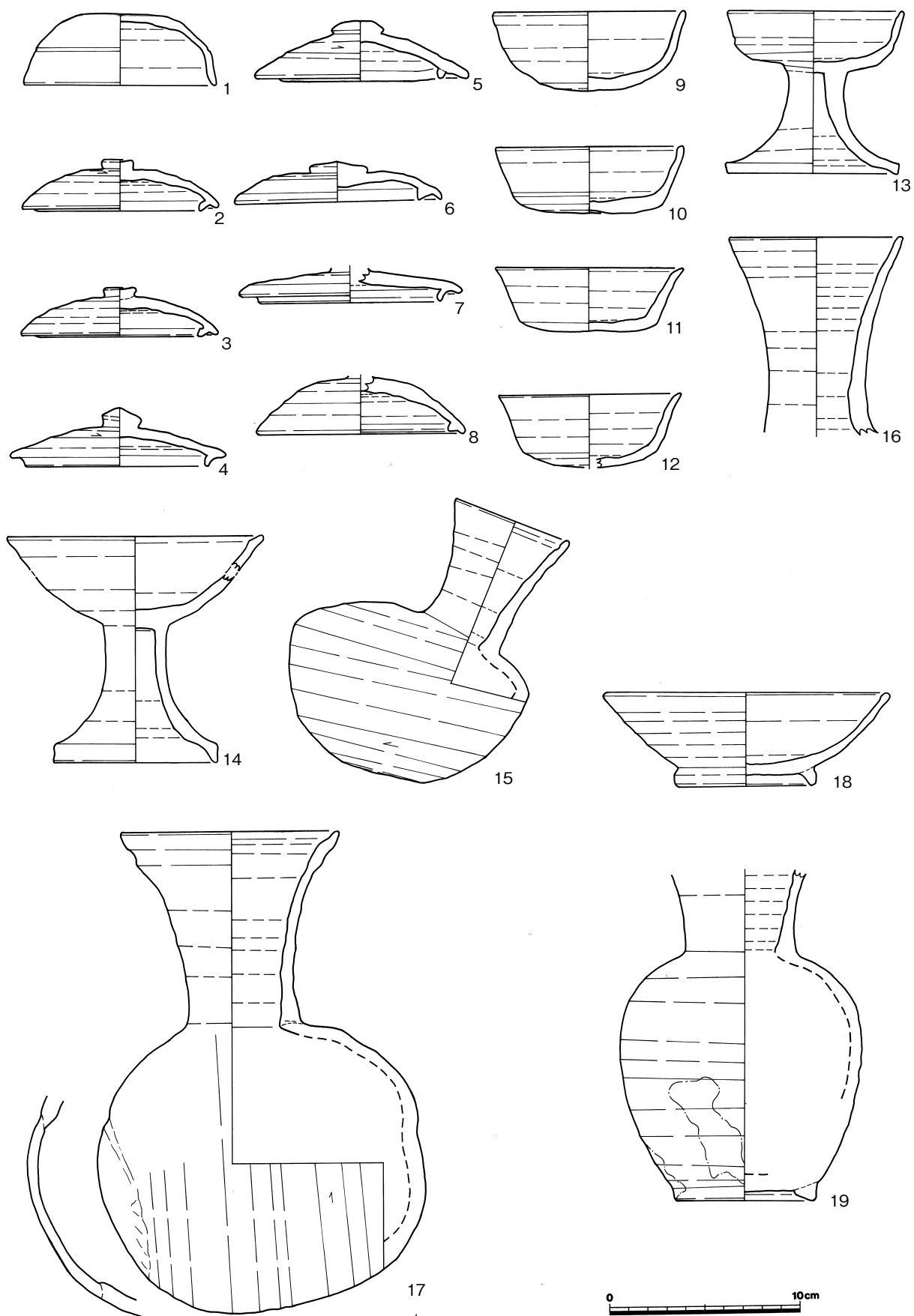
灰釉陶器 (18・19) 18は碗で、ほぼ完形である。石室内に上下反転して伏せられたかたちで出土した。O-53～H-72号窯期で10世紀のもの。施釉はほとんど認められない。19は長頸瓶で、外面一面に灰釉が施されている。口縁部が意図的に打ち欠かされている。

編年的位置付けと特徴 湖西窯製品には、鈴木敏則(鈴木2001)と後藤建一(後藤2015)の編年がある。両者にはそれぞれ長所と短所があり、鈴木編年は主要器種以外にも目配せした編年が成されているのに対し、7世紀前葉以降の坏・蓋の多様な形態をカバーしきれていない。一方、後藤編年は出土資料の制約から高坏や瓶類など坏・蓋以外の器種の編年に詳細を欠いている。前者は消費遺跡、後者は窯出土資料にもとづく方法論の違いによるもので、器形変化の捉え方に限れば相互に補完し合える関係である。問題になるのは猿投窯、陶邑窯及び都城出土須恵器との並行関係で、これは両者の認識の違いにより、とくに都城編年の飛鳥Ⅱ並行以降のズレが著しい。

石室内出土土器は、大きく下記の3時期にまとまりがある。

- ①後藤Ⅳ-2(飛鳥Ⅱ)、鈴木Ⅳ期前(飛鳥Ⅱ～Ⅲ(古))
- ②後藤Ⅳ-3(飛鳥Ⅲ古)、鈴木Ⅳ期後(飛鳥Ⅲ(新)～Ⅳ)
- ③後藤Ⅴ-1(飛鳥Ⅲ新～Ⅳ)、鈴木Ⅳ期末(飛鳥Ⅴ・平城Ⅰ)

①と②の時間差は決して長くはなく、おおむね7世紀中葉と一括して表現できる中での時期差である。一方、③は7世紀末～8世紀初頭のものである。



第5図 石室内出土土器 (1 / 3)

(2) 石室前出土土器 (第6図、表1)

石室前から出土した土器は残存状態が悪く、大半が残存率は50%に満たない。多くが墓前祭祀に使用され、その時に破碎されたものである。

須恵器・蓋 (1) かえりのある蓋で、摘みは欠損している。器形は扁平でかえりは低い。

須恵器・坏 (2~6) 2は底部で、外面はわずかに平坦になる。内面には降灰の痕跡や自然釉が認められる。3・4は体部で、3は内面に自然釉が、4は端部内面に沈線が認められる。5・6は底部と体部の境界が屈曲し、境界の外面は稜を成すように張り出している。

須恵器・壺 (7・8) 7は長頸壺または直口壺の体部である。肩の位置は低くあまり張り出さずに丸みを帯びる。また外面の上部には自然釉が付着する。8は大型の壺の体部片である。外面には平行タタキが密に行われ、内面は当て具痕を丁寧にナデ消している。

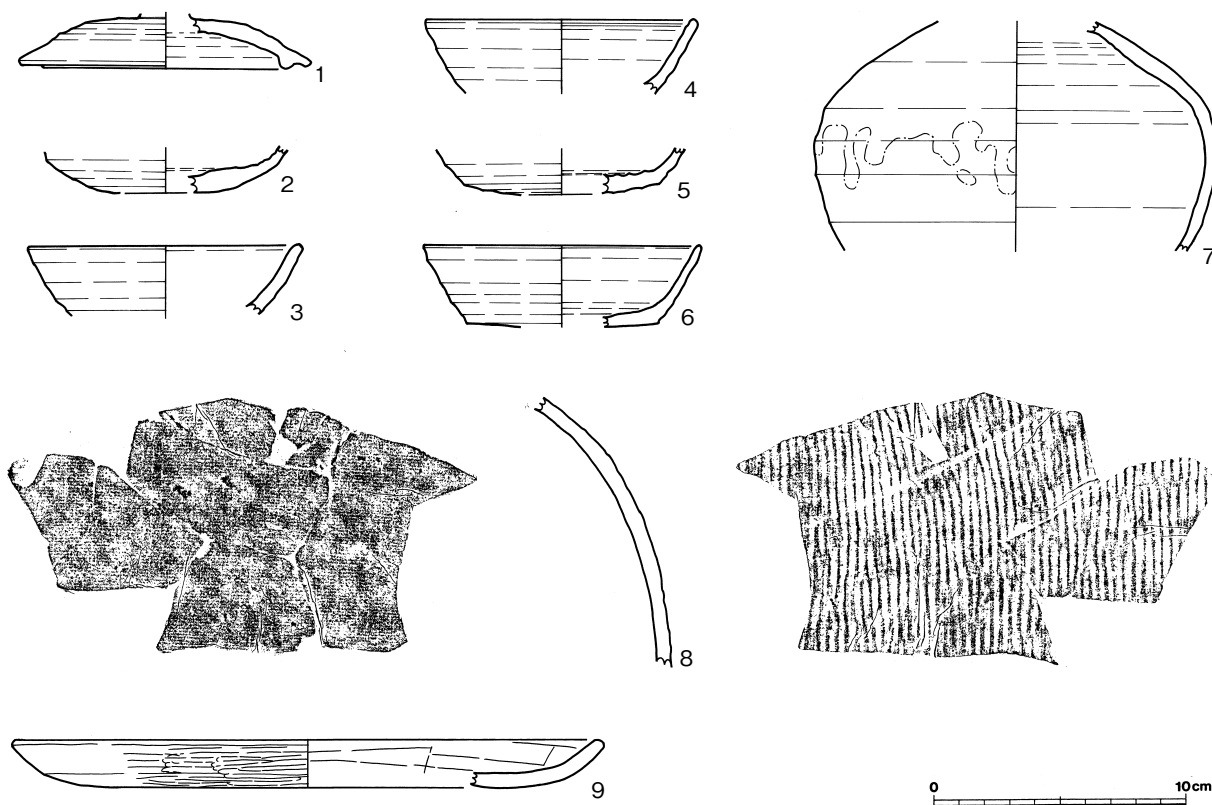
土師器・皿 (9)

器形の浅い皿で、本墳から唯一出土した土師器である。内面はナデ調整で、外面は横位に細かなヘラミガキが見られる。

編年的位置付けと特徴 石室内出土須恵器とおおむね一致しており、初葬と追葬のそれぞれで行われた墓前儀礼に伴うものである。壺7のみ飛鳥Iと時期が遡るものだが、古い器物を使用したと解釈される。

(3) 毛彫馬具

本墳を最も特徴づける金銅製馬具のセットである。鉄製鏡板を除くほぼすべてに毛彫文が見られる。轡、鞍、辻金具、杏葉や繫の各種の飾金具が出土しており、馬具がフルセットで存在したのは間違いないだろう。また出土場所は、玄門直後の右側壁際に集中していた。馬具の鍍金は金



第6図 石室前出土土器 (1/3)

箔貼りではなくアマルガム法によるもので、金具の表面や鋌頭のみには施されており、裏面や鋌脚は銅地が露出している。鍍金の発色はやや明るい光沢を帯びた黄色に近い。

轡（第7図1～3） 鉄製の大型矩形立聞環状鏡板付轡と金銅製の吊金具で構成されるもので、鏡板の一部と吊金具1点が残存するだけである。

1は金銅製の吊金具で、後述する帯先金具に薄い金銅板が鋌留めされる。帯先金具部分は3鋌を三角形に配置するもので、中央の下端に二又の蕨手文と上向きの光芒文（平行多条線、田中1980）を配置するのはほかの帯先金具と同じだが、下の2鋌のそれぞれ上に半円弧文と上向きの光芒文を追加している。金銅板は帯先金具部分と同じ幅で、先がゆるやかに弯曲している。大谷宏治が静岡県富士市東平1号墳の吊金具と同様の構造と指摘する（大谷2018）ように、金銅板はここから折れ曲がり鏡板の立聞に通す構造となる。鋌は帯先金具部分と金銅板を通し、さらに折り返した金銅板を通して薄い銅板でかしめる。この銅板（ワッシャー）は不整形で大きさも異なるものである。この折り曲げた金銅板の内側に革帯が挟まれる。帯先金具部分の高さ2.3cm、幅2.8cm、金銅板の残存長1.7cm、鋌の長さ1.0cm、鋌頭からかしめ板までの長さ0.6cmである。帯先金具よりもサイズが大きく、文様が異なることを含めて帯先金具の転用品ではない。

鉄製の大型矩形立聞環状鏡板付轡は、鏡板片2点が存在する。2は、わずかに山形を呈した大型矩形立聞を伴い、断面は円環が円形、立聞が長方形である。残存する高さ5.3cm、幅4.4cm、円環の太さ0.8cmで、円環の推定復元幅は7cm程度で同製品としてはやや小型の新しい特徴である。3は1とは接合しない。立聞の基部がかるうじて残るものの円環の残存率は低い。また、銜先環の一部が付着している。残存する高さ5.1cm、幅3.4cmである。

鞍（鞍）（第7図4・5） 金銅製の鉸具に毛彫を伴う花形座金具を持った鞍が2点出土しており、木製鞍が存在したことがわかる。2点とも奥壁右手前から出土した。

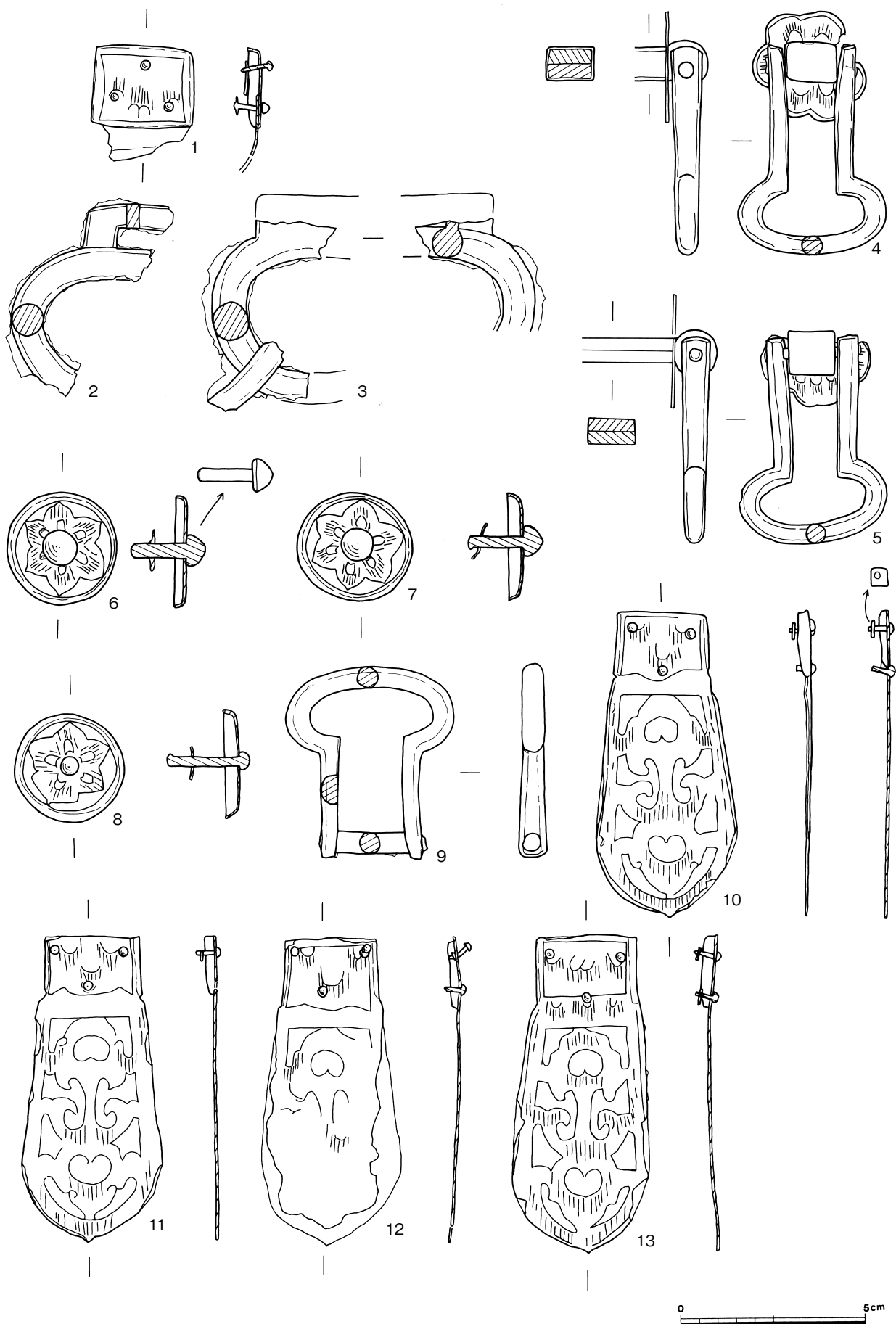
4は、凸字形の金銅製鉸具の基部に鉄製の心棒を通し、そこに1本の平らな鉄棒を折曲げて脚とし、曲げた端部を環状にしてそこに心棒を通すことで鉸具と連結させている。座金具は丸みを帯びた6弁の花形で、表面は鍍金され毛彫で縁取りがされるほか、各花卉に対応する形で半円弧文を6か所に設けそれぞれ外向きの光芒文を描いている。また座金具の裏側にある脚は、外側を銅板で被覆しているが、この銅板と座金具とは別造りである。鉸具は長さ5.8cm、最大幅4.1cm、鉸具の下端の幅3.1cm、鉸具の奥行き鉸具の環状部の太さ0.5cmである。

5は、基本的に鞍4と同様の構造であるが、花形座金具は上部が欠損して3弁が残るだけであり、鉄棒を折り曲げた脚を被覆した銅板は存在しない。座金具の毛彫文はやはり半円弧文と外向きの光芒文であるが、半円弧の数が花卉と一致しない。鉸具は長さ5.7cm、最大幅4.0cm、鉸具の下端の幅3.0cm、鉸具の奥行き0.8cm、鉸具の環状部の太さ0.5cmである。

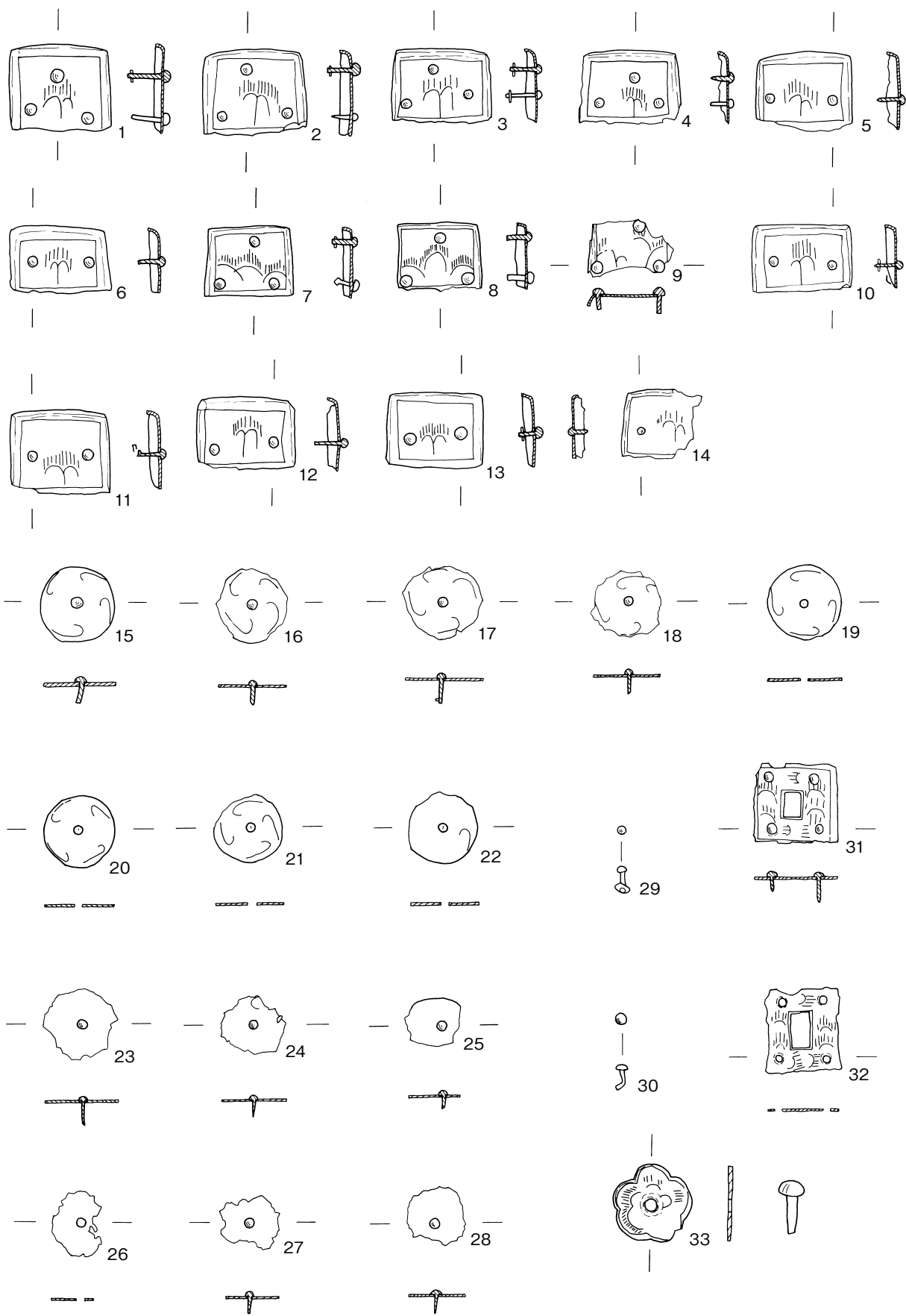
辻金具（第7図6～8、表3） 中央に笠形の飾鋌を持つ金銅製の円形金具で、周辺は折り曲げられる。鋌は背後から不整形な銅板によってかきしめる。文様や形状の違いで2種類に分けられる。6・7は文様が縁に沿う円文の中に尖った6枚の花弁を持つ花形文を描いており、各花卉には長い半円弧文と円弧文を組み合わせた複弁状の文様を施し、外方向に光芒文を配している。鋌は鋌頭の径が0.9cm、長さが2.0cmで、鋌頭は途中で稜を持ち先端が尖っている。一方8は円文の中に尖った花弁を持つ花文を描く点は6・7と共通するが、花弁の1枚を大きく表現した5弁となっている。鋌頭からかきしめた銅板までの長さは0.8～1.1cmと大きくは変わらない。また鋌は鋌頭の径が0.5cm、長さが2.3cmと他とは異なり、鋌頭に稜は見られない。

鉸具（第7図9） 金銅製の凸字形を呈した鉸具である。形状や連結部の鉄製心棒など鞍と類似するが、大きさや形状が異なるため別製品として扱う。長さ5.3cm、最大幅4.6cm、鉸具の下端の幅2.8cm、鉸具の奥行き0.8cm、鉸具の環状部の太さ0.55cmである。

棘付花卉形杏葉（第7図10～13、表2） 蓮花形杏葉などとも呼ばれてきた杏葉であるが、先



第7図 毛彫馬具-1 轡・鞍金具(鞍)・辻金具・鉸具・棘付花弁形杏葉(2/3)



第8図 毛彫馬具-2 帯先金具・飾金具 (2/3)

学の提言に基づき「棘付花卉形杏葉」と呼称する。方形の造出部と花卉形の身部とで後世され、1枚の銅版の上部の左右に切り込みを入れ、そこを折り曲げて造出部にしている。造出部には逆三角形に鋌を3か所配置し、背後を銅板でかshめて革帯に固定する。また、身部の側縁は他例であれば1か所づつ棘状の突起を有するが、本例は表現が曖昧である。4点が出土しており、文様はそれぞれで微妙に異なる。

10は残存状態が最もよい。文様は造出部が側縁に沿って1条の直線文を描き、下は鋌の位置を意識するかのように緩く下向きに線をカーブさせて区画線とする。その中に下向きの光芒文を伴う下向きの半円弧文を鋌に合わせて3か所配している。身部は後述する法隆寺式文様の唐草文で、法隆寺資料の文様構成を引き継ぎながら透彫りではなく毛彫表現されたものである。文様は側縁に沿って1条の線で囲み、上部を直線文で結んだ区画線の内部に4段で表現され、上から1段目と2段目、3段目と4段目の間にそれぞれ上下を逆転するかたちで猪目文を計2か所配置する。また、半円形の文様には下向きの光芒文を伴う。また側縁に沿って単条の光芒文を連続させている。4段目は2か所に小さな蕨手状の張り出しが見られる。

11は基本的に1と同じ文様構成であるが、1段目と4段目に2か所づつ小さな蕨手状の張り出しが見られ、側縁にそった単条の光芒文が少ないなどわずかな違いが見られる。

12は残存状態が最も悪く、身部の側縁が欠損し表面の剥離が著しい。基本的に1と同様の文様構成であろう。

以上に対し、13は他とは異なる特徴がいくつか見られる。全体の長さはほかより0.5cmほど長く、そのためか造出部と身部の文様の間に下向きの光芒文と半円弧文を3か所追加している。造出部の縁取りとなる区画線はしたがカーブせず直線となり、中央の半円弧文は下向きの二又蕨手文で左右は鋌の下に配置されている。身部は1と同様の唐草文+猪目文であるが、他では見られない上部の猪目文周辺の光芒文があるほか、2段目の光芒文の範囲も異なる。

なお、高松由は11の毛彫文が線幅が一定で曲線を緩やかに描き、文様の対称性が保持されているのに対し10・13は線幅が一定せず曲線を分割して彫る癖が見られ、厳密には左右非対称であることから、「明らかに技術水準が異なる二人の工人による製作」を想定している(高松 2011)

帯先金具(第8図1～14、表4) 他の古墳出土例では「方形飾金具」などと呼ばれるが、革帯の先端を被覆するのは明らかであり、田中広昭が指摘する古代の銚帯金具の「鉞尾」の前身に相当する「帯先金具」(田中1990)と呼称する。14点が確認されている。繫の革帯の先端に取り付けた金銅製の金具で、3鋌を三角形に配置したもの(1～4・7～9)と2鋌をほぼ水平に配置したもの(5・6・10～14)がある。また法量にも大・中・小が認められ、とくに幅の違いは繫の幅を示すものであり、使用場所により繫の幅が異なる可能性がある。同一セットの中にあってサイズの規格性が低いと言い換えることができるだろう。また、毛彫文は二又の蕨手文に上方向の光芒文(文様A)が基本であるが、三鋌のものには3つの連続する半円弧文と上向きの光芒文、または半円弧文と二又蕨手文の折衷的な文様に上向きの光芒文を伴うもの(文様B)が見られる。以上を整理すると次のとおりである。

3鋌	-	大型(高さ2.3cm・幅2.6cm前後)	-	文様A	:	1・2
〃	-	中型(高さ2.0cm・幅2.6cm前後)	-	文様A	:	3・4
〃	-	小型(高さ1.9cm・幅2.3cm前後)	-	文様B	:	7～9
2鋌	-	大型(高さ2.2cm・幅2.6cm前後)	-	文様A	:	5・11
〃	-	中型(高さ2.0cm・幅2.6cm前後)	-	文様A	:	4・12・13(・14)
〃	-	小型(高さ1.8cm・幅2.6cm前後)	-	文様A	:	6・10

いずれも、三辺を折り曲げた金銅製の方形金具に金銅製の鋌が差し込まれるものである。繫への固定は鋌を差し込んでその裏側から小さな銅板でかshめる方法で、銅板は方形ではなく不整形

である。方形金具からかかしめ板までの間の長さは0.25～0.8cmとまちまちで、複数の革帯を固定する部分があるのだろう。

円形飾金具（第8図15～30、表5） 円形の薄い金銅板を鉤で革帯に留めたもので、14点が確認されている。欠損するものが多く表面の剥離が進むものが見られるが、外側から直線的に延びた後丸く折り曲げる蕨手文を4か所配置している。円形板の中央1か所に鉤孔を設け、小さな笠鉤を挿入して革帯に刺し不整形な薄い銅板で裏側からかかしてあり、鉤の抜け落ちや鉤脚の欠損が多数見られる。29・30は円形飾金具の鉤で、29はかかしめ板が遺存し、30はかかしめ板がない代わりに鉤脚が折り曲げられている。

透入方形飾金具（第8図31・32、表5） 長方形の透かしを持った薄い金銅製の方形板を、4か所を鉤留めするものである。毛彫文は鉤の間の1もしくは2段の半円弧文と上向きの光芒文であるが、31は半円弧文からの光芒文が下向き、もしくは半円弧文自体が省略され光芒文だけになった部分が見られる。

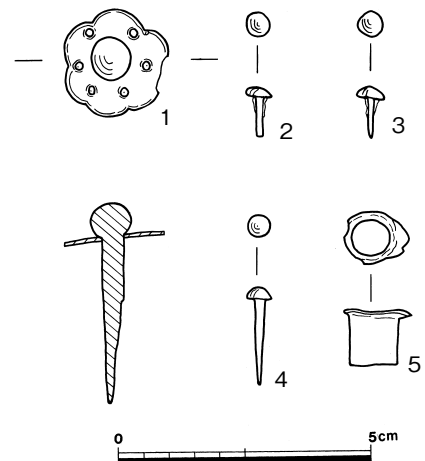
花形飾金具（第8図33、表5） 5弁の梅花形の薄い金銅板の中心に孔をあけ、鉤頭の大きな飾鉤を打ち込むもので、鉤は長さ1.45cm、鉤頭の径0.6cmであり、他の金具とは鉤のサイズが明らかに異なる。金銅板の表面には毛彫りで花卉に沿って縁取り、鉤孔の周りに連続する半円弧文と外側への光芒文が見られる。鞍など厚みのある部品に打ち込んで装飾した金具と考える。

（4）その他の金銅製品

花形飾り鉤（第9図1） 使用場所は明らかでないが、馬具であれば鞍の両輪を装飾したものだだろう。毛彫りが無い6弁の花形金銅板に長い鉤脚の飾り鉤を伴い、花形金銅板には花卉間に対応して6か所の孔を設ける。鍍金は鉤頭と金銅板の表面のみに行われ、金銅板の裏側と鉤脚は銅地が露出している。鉤の長さ3.9cm、鉤頭の径0.8cm、金銅板の長さ・幅とも2.1cmである。

飾り鉤（第9図2～4） 鉤頭のみ鍍金した笠鉤である。2・3と4とで脚の長さが異なる。その形状とサイズから、馬具の飾金具に伴うものではない。2は長さ1.0cm、鉤頭の径0.45cm、3は長さ1.0cm、鉤頭の径0.5cm、4は長さ1.9cm、鉤頭の径0.4cmである。

鴉目金具（第9図5） 銅製の筒形を呈した金具で、端部の片方を外側に折り曲げて覆輪にしている。袋状柄頭に伴う鴉目金具で、恐らく金属製の方頭大刀柄頭が存在したのだろう。覆輪の鍍金の有無は不明である。長さ1.1cm、筒部は径0.95cm、覆輪は1.0×1.3cmである。



第9図 その他の金銅製品（2／3）

（5）鉄製馬具（第10図）

金銅装馬具とセットを成さない鉄製馬具で、金銅装馬具とは出土位置が異なり玄門の手前の羨道左側壁付近に集中していた。轡、鞍、鐙からなる馬具一具が確認される。

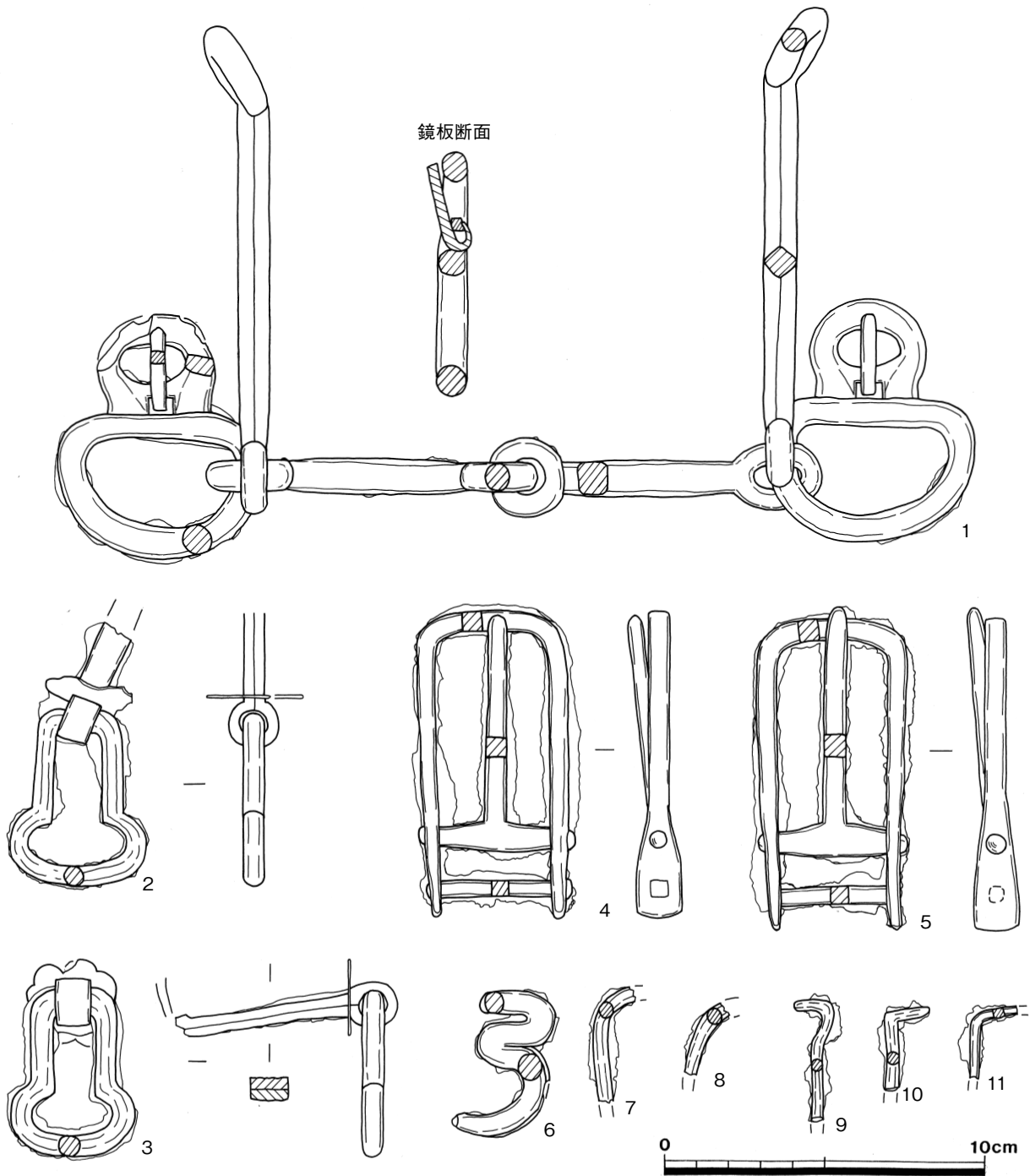
鉸具立聞環状鏡板付轡（1） 立聞が鉸具になる円環を有し、銜先環に鏡板と引手が連結する「引手・銜共連」（岡安1984）である。全体に骨太で頑丈な印象を受ける轡である。実物は銹化のため鏡板に引手が接着し銜も折れ曲がって動かない状態だが、復元的に展開して図化している。以下、説明の便宜から図の左右で各部位を説明する。

鏡板は左側が鉸具の一部を欠損するだけで全形が把握できるのに対し、右側は円環の一部が残存するだけのため左側をもとに復元して図化した。立聞孔は扇形に近い楕円形を呈し、立聞の基

部に長方形の孔を設けてそこに刺金を蕨手状に巻き付けている。円環の断面は円形で、刺金の断面は方形である。左側の鏡板は高さ7.2cm、幅6.4cm、円環の太さ1.0cm、立聞の高さ3.2cm、幅3.65cm、刺金の長さ2.7cm、指金の幅0.4cmをそれぞれ測る。

銜は完存している。2本の鉄棒を円形の脚金で連結させ、外側には円形の銜先環を鍛接する。銜身（銜先環を除いた部分）の断面形は方形、銜先環と脚金は円形である。銜身は鉄棒それぞれの中央に行くほど太くなる。長さ19.2cm、銜身の長さ13.75cm、銜先環の外径は左右とも2.7cm、脚金の外径は左右とも2.4cmを測る。

引手は左右ともに残存し、引手壺は引手本体に鈍角に鍛接される。引手端環から徐々に太くなり、



第10図 鉄製馬具 (1/2)

中間から引手壺にかけてはほぼ一定である。断面は本体が方形、引手端環と引手壺が円形である。左側の引手は長さ 15.3cm、本体の太さ 1.0cm、引手壺の外径 3.0cm、引手端環の外径 2.3cm、右側は長さ 15.0cm、本体の太さ 1.0cm、引手壺の外径 3.0cm、引手先環の外径 2.1cm である。

鞍（鞍）（2・3） 2点の鞍を伴う木製鞍で、鞍本体は遺存しない。いずれも銅製の座金具を伴うが、鉸具並びに脚は鉄製である。鉸具は凸字形を呈した一連の輪金で、1本の平らな鉄棒を折り曲げて脚とし、曲げた端部を環状にして基部をそこに通すことで連結させている。座金具は多弁の花形となるが、欠損するため花卉の数は分からない。また毛彫など文様は無い。3は座金具が半分以上残るほか、脚も比較的良好に残っており、直線的に伸びた後先端をわずかに折り曲げたと考えられる。2は鉸具の長さ 5.4cm、幅最大 4.25cm、下端の幅 2.6cm、太さ 0.6cm。3は鉸具の長さ 4.6cm、幅最大 4.0cm、下端の幅 2.6cm、太さ 0.65cm、残存する座金具の長さ 2.45cm、幅 2.75cm、脚の長さ 5.45cm である。

鐙（鉸具）（4・5） 鉄製の大型鉸具 2点（1対）が轡の南側から出土した。形状から鐙の鉸具とするのが妥当で、この場合兵庫鎖や吊金具を伴わず革帯で連結した木製壺鐙であろう。鉸具は輪金が隅丸長方形に近い逆U字形を呈し、T字形の刺金と革帯に連結した心棒を持つ。輪金の側面形は下端で奥行きを広げ、端部はわずかに丸みを帯びる。また刺金と輪金の連結部は、側面に鋌頭状にとび出しているほか、心棒の連結部は外側からの単打により端部が潰されている。各部位の断面形はすべて方形である。4は輪金の長さ 9.6cm、幅最大 4.65cm、下端の幅 4.2cm、太さ 0.6cm、下端の奥行き 1.4cm、刺金の長さ 7.4cm、輪金に挟まれた幅 3.5cm、心棒の輪金に挟まれた長さ 3.5cm。5は輪金の長さ 9.7cm、幅最大 4.6cm、下端の幅 4.1cm、太さ 0.65cm、下端の奥行き 1.4cm、刺金の長さ 7.9cm、輪金に挟まれた幅 3.4cm、心棒の輪金に挟まれた長さ 3.3cm である。

鉸具（6～11） いずれも鉄製の鉸具と考えたが、馬具かどうかは明らかではない。6は特異な形状の鉸具で、輪金や刺金を持たず1本の断面円形の鉄棒を折り曲げて8字形にしたものである。他例から上部の中央は接合しない。幅広の帯を通したものと考えられる。なお、毛彫馬具や鉄鏃に混ざって出土しており、いずれかに伴う金具であろう。7～11は輪金の一部と考えるが、7・10は端部が存在しており鉸具以外の可能性がある。出土位置は分からない。

編年的な位置づけと特徴

轡 岡安光彦は鉸具立聞環状鏡板付轡の集成を行い、その鏡板のサイズについて分析を行った。その成果として、本例を7世紀第1四半期（陶邑 TK217 型式期＝飛鳥Ⅰ新～Ⅱ）の代表的な事例として挙げている（岡安 1985）。一方で立聞が円環との鍛接部があまりくびれず、立聞孔が扇状に近づくのは新しい傾向で、飛鳥Ⅰ新の時期まで遡らせるのは難しいだろう。これに従えば、本例は飛鳥Ⅱに位置づけるのが妥当である。なお、棒状の部分が中心に向かい太くなること、断面が方形を呈することは精製品としての印象を抱かせる。中央の工房で製作されたものとする。

鞍（鞍） 宮代栄一の研究によれば、脚と別造りで刺金を持たない凸字形の輪金は陶邑 TK43～TK217 型式期に位置づけられるとされ、板状の花弁形座金具は本古墳例を代表に陶邑 TK217 型式期のものとする（宮代 1996）。すなわち飛鳥Ⅱ～Ⅲ古である。

鐙（鉸具） 斎藤弘は、古墳時代の鐙を検討する中で逆U字形の輪金を持つ鉸具を陶邑 TK217 型式期よりも後のものとしており、7世紀中ごろの年代を与えている。また兵庫鎖を伴わないものも古墳時代の木製壺鐙の最終段階に位置づける（斎藤 1986）。尾上元規も同様の視点から、こうした事例に飛鳥ⅢないしⅣ以降としている（尾上 2025）。従ってここでは飛鳥Ⅲ～Ⅳとしておく。

鉸具 編年的な位置づけは難しい。6は静岡市賤機山古墳から出土しており、轡の鏡板（瓢形鏡板が変容したもの）と解釈されている。ただし、組み合うとされる銜や引手とは接合しないようであり、用途はさらなる検討を要する。

以上から、轡や鞍は飛鳥Ⅱとなるが、鐙はこれより新しく飛鳥Ⅲ～Ⅳである。各研究者が根拠

にする須恵器の並行関係に齟齬がある可能性はあるが、それでも兵庫鎖を伴わない鎧を古墳時代終末期の最終段階とするのは理解できる。

(6) 武器 (第11図)

武器には大刀、短刀、鉄鏃、弓飾り金具(両頭金具)がある。また、不明鉄器と刀子を便宜的に武器に含めて説明する。

大刀(1) 横穴式石室の奥壁に近い左側壁に沿って置かれたもので、2片に分かれて出土した。直刀で、先端はふくらを伴わずに直線的なカマス切先である。刃側と背側に直角関を持った均等両関で、茎は胴部がわずかに先細りとなる中細である。茎尻は欠損する。また、茎の下端近くに目釘が1か所存在する。刀身は断面が長い二等辺三角形となる平造である。全体に残存状態は良好だが外装の痕跡は乏しく、わずかに鞘や柄の木質が確認される程度である。残存する全長は74.5cm。刃部の長さ64.0cm、幅3.0cm、厚さ0.5cm。茎の残存長10.5cm、厚さ0.5cm。

短刀(2) 大刀と並んで出土したもので、茎は欠損している。大刀に比較して切先のふくらはわずかに張り、刀身の関は均等両関である。ただし、刃側は若干撫角となっている。また刀身は平造である。外装の有機質の痕跡はほとんど残存しないが、茎には鏹の痕跡と柄の木質が認められる。残存する全長は43.4cm。刃部の長さ42.2cm、幅2.2cm、厚さ0.5cm。茎の残存長2.1cm。

鉄鏃(3~16、表6) 3は平根鏃である。鏃身部は長三角形で、大型の重抉りを持つ。鏃身部は平造である。平根鏃はこれ1点のみで、儀礼用矢鏃の典型的な組成といえる。

4~16は尖根鏃で、いずれも頸部と茎部との境界に方形突起を持つ。頸部幅が細く華奢な印象(0.3~0.4cm)のA類とやや太い(0.45cm以上)B類に分けられる。鏃身部の形態が分かるものは、鏃身部と頸部の境界があいまいで、鏃身の先端に刃を設ける鑿箭式であるが、A類は鏃身の先端が圭角状になり、片丸造のAa類(4~8)と瑞刃造のAb類(9)に分類できる。なお、端刃造とした9は鏃身部の先端が銹化によって変形しているため、厳密に端刃造といえるかどうかは微妙である。さらにB類は頸部から鏃身部が直線的なBa類(10~12)と鏃身部が幅を広げるBb類(13)に分類が可能である。有機質の痕跡として、茎部に樹皮卷や矢柄の木質が依存する例がいくつか見られる。

弓飾り金具(両頭金具)(20~22) 筒金に片方が球形の頭部を成した鉄棒を通して反対側にも頭部を作り出す鉄製金具で、3点が出土した。頭部は22のみやや不整な楕円形を呈している。筒金は断面が円形で、両端の花弁はすべて欠損している。筒金の表面にはわずかに木質が観察できる。このうち22は奥壁際、21は玄門前から出土しており、位置が離れているため弓は2張存在したと思われる。また22を伴う弓は大刀や短刀に並んで置かれていたのだろう。20は全長2.7cm、頭部の径0.4・0.5cm、筒部の長さ2.0cm、径0.55cm。21は全長3.1cm、頭部の径0.4・0.5cm、筒部の長さ2.15cm、径0.5cm。22は残存全長2.25cm、頭部の径0.45~0.65cm、残存する筒部の長さ1.6cm、径0.45cm。

不明鉄器(23) 先端が鋭利に尖った鉄製の利器で、刃部は断面が扁平な三角形を呈し、柄の断面は方形である。ミニチュアのヤリガンナのような形状である。

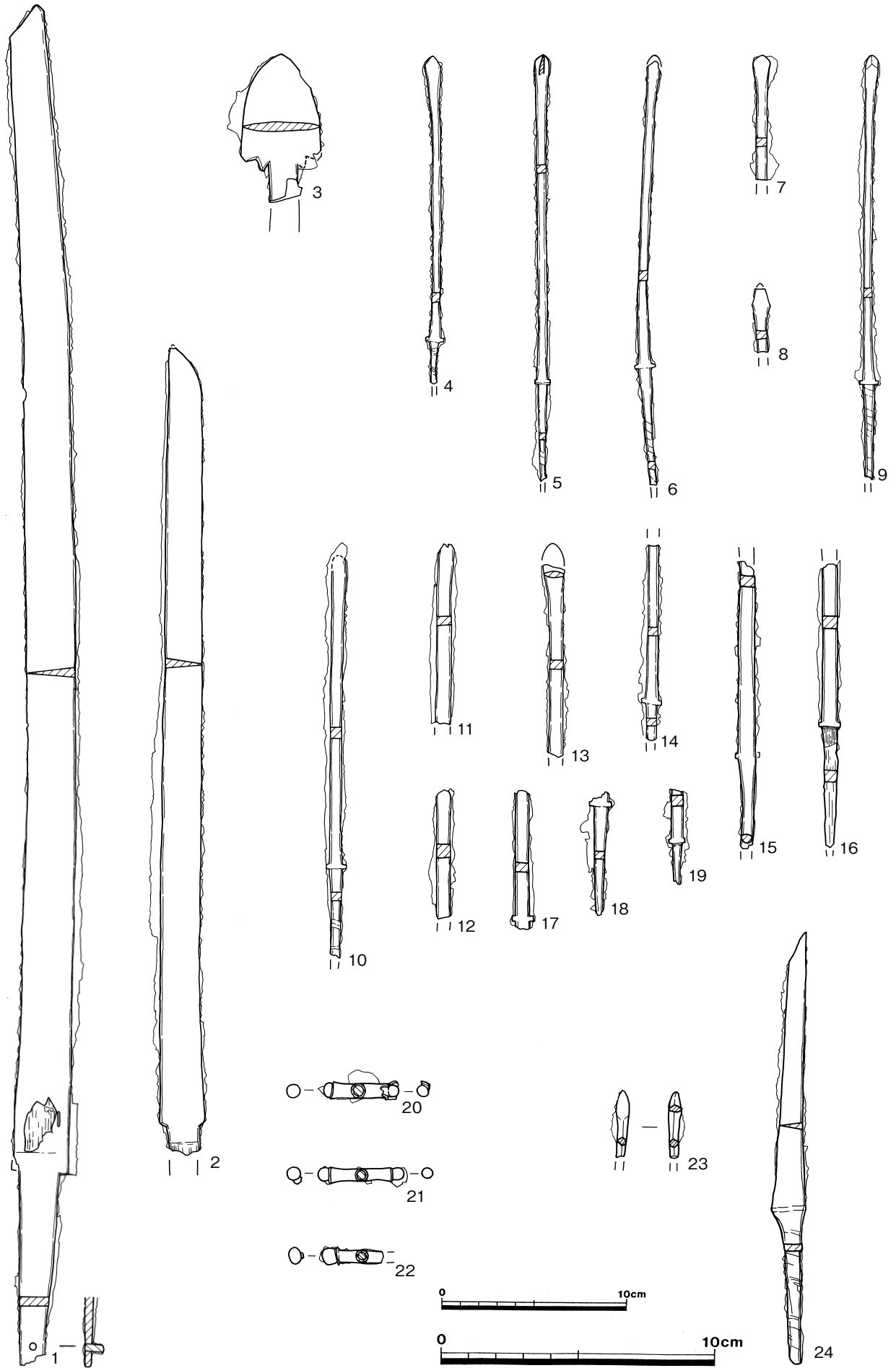
刀子(24) 比較的長い刀子である。切先はふくらが乏しいカマス切先状で、古墳時代終末期的な形状と言える。刀部は断面形が長い二等辺三角形の平造で、関は両関だが刃側が深く、いずれも撫角である。また関付近には鏹の痕跡が残る。茎には樹皮卷がわずかに認められる。

編年的な位置づけと特徴

大刀 白杵勲の研究によれば、均等両関中細茎は古墳時代終末期の典型的な大刀の形式である。

短刀 茎が欠損するほかは大刀と同様の特徴を持ち、ほぼ同時期と言える。

鉄鏃 平根鏃3は時期が不明ながら、特殊な重抉りを持った古墳時代的な儀礼鏃である。一方、



第11图 武器 (1/2 · 1/3)

尖根鏃は実戦的で時期が下るほど軽量で細身になる傾向があり、それは東三河でも当てはまる（岩原 2023）。東三河の終末期古墳ではB類が多く認められ、鏃身の先端が圭角状となったA類鏃式鏃は少ないが、類例として静岡県富士市伝法東平1号墳出土鏃を挙げることができる。その繊細な加工と遠隔地の古墳との類似から、王権膝下の工房で生産された可能性がある。いずれにせよ、飛鳥Ⅱ・Ⅲ以降の鏃であろう。

4 考察

(1) 出土品から見た古墳の築造時期と葬送

須恵器の帰属時期は飛鳥Ⅲを前後する時期と飛鳥Ⅴ・平城Ⅰに大きく分かれ、最低2回は葬送があったことが分かる。そして鉄製馬具を追葬時の副葬品と考えた場合、これを飛鳥Ⅴ・平城Ⅰの時期まで下らせるのには無理がある。従って、初葬（＝古墳の築造）は飛鳥Ⅱ～Ⅲ、追葬は1回目が飛鳥Ⅲ～Ⅳ、2回目が飛鳥Ⅴ・平城Ⅰと解釈される。つまり3回の葬送が推定できる。

ところで問題となるのは毛彫馬具の年代観である。後述する多くの先行研究では、本古墳の毛彫馬具を飛鳥Ⅱの典型例と位置付けている。一方で毛彫馬具の大半が須恵器を共伴せず帰属時期が判明する例はまれとする指摘（森田 2005）がある。そうした中で上向嶋2号墳は数少ない須恵器共伴古墳と評価されてきたが、出土須恵器には古墳時代型とされる合子状蓋坏が見られないこと、蓋の多くが低い器形であることは飛鳥ⅡよりもⅢの要素が強いと受け止めざるを得ない。ここでは、後述するように他例との関係から毛彫馬具の時期を飛鳥Ⅱからは引き下げにくいため、須恵器Ⅰ型式程度の保有期間が存在したと解釈しておく。しかし須恵器共伴例が少ない以上、今後も毛彫馬具全体の帰属時期の検証は続けるべきだろう。

(2) 列島の毛彫馬具の中での位置づけ（第12・13図）

次に、上向嶋2号墳を象徴する毛彫馬具の評価を行いたい。列島の毛彫馬具出土古墳は、墳丘規模が15～20m前後のものが多く、地域の最高首長墓以外から多くが出土している。この状況は上向嶋2号墳にも当てはまり、奢侈品以外の性質を毛彫馬具に認めることができる。

次に、列島の毛彫馬具生産の中での位置付けを確認する必要があると考え、毛彫馬具の変遷を示した。帰属時期が判明する例はまれであるが、文様や形態的な特徴から捉えられる型式変化に基づいた時期変遷が先学によって数多く試みられている（内山 1996、大谷 2018・2025、岡安 1990、坂本 1979、白井 2002、田中新 1980・1997、田中広 1990、富永 2002、濱岡 2003、森田 2005）ので、その成果に基づきながら棘付花卉形杏葉の型式変化をもとにⅠ～Ⅳ期に分けて理解した。

Ⅰ期 棘付花卉形杏葉（とその祖型）が舶載品を含む唐草文の透彫り品からなる時期で、（半円）弧文と光芒文の組合せからなる「道上型毛彫」文（田中 1980）が生み出される。また円形の辻金具や帯先金具といった毛彫馬具特有の部品が創案される。TK209新～飛鳥Ⅰ並行。

Ⅱ期 棘付花卉形杏葉は毛彫文が主体となり、唐草文系と芝草文系であるパルメット文とが併存する。パルメット文の東一本柳古墳出土品は、文様が毛彫りではなくなめくり打ちされたⅡ期最古段階の馬具で、蝶番構造を除けばその後の杏葉の形態の規範となったものである。さらにはⅠ期の唐草文系とは異なる新たな系統として生まれたものでもある。そのほかでは帯先金具、方形・円形・花形などの各飾金具がセットを形成し、毛彫馬具の組成が完成する。飛鳥Ⅱ並行。

Ⅲ期 棘付花卉形杏葉は、道上型毛彫文を継承しながら、唐草文系の一部（猪目文）とパルメット文が逆転した芝草文が融合し、芝草文主体の芝草文系が徐々に文様を変化させていく時期である。その画期となるのは浅間山古墳出土品であり、その後の杏葉は浅間山古墳出土品を起点にして展開する。Ⅲ期の中で芝草文は半円弧文と光芒文に変化し、猪目文が二重線で表現されて大

きくなりやがて文様の意図が見失われ、身部の文様構成が簡略化されて3段以上から2段に減少する。以上の文様の退化傾向を3小期に分けて把握した。辻金具は花文と連弧文の2系統に分かれ、方形飾金具は長方形のものが出現し、円形飾金具は文様の粗雑化と無文化が進んだのち消滅する。飛鳥Ⅱ～Ⅲ並行。

Ⅳ期 棘付花卉形杏葉は、文様が半円弧＋光芒文や猪目文をкаろうじて留めるものがある中で、連弁をモチーフにした木葉文などが現われる。辻金具は十字文となる。帯先金具は無文化が進み、方形飾金具は長方形に統一されて後の鋳帯金具へと継続する。飛鳥Ⅲ並行以降。

形態的な変化として、棘付花卉形杏葉の造出部の鋳配置は三角形と逆三角形の2系統があり、文様の系統を反映することなく混在する。大きな流れとして、Ⅰ～Ⅲ－2期までは三角形配置が多く、Ⅳ期には逆三角形に統一される。造出部の頂部は、山形と方頭形がⅡ～Ⅲ期に併存し、Ⅳ期には方頭形に統一される。また新しくなるほど身部の幅を狭めるものが増え、Ⅳ期になると寸詰まりの形状が現われる。さらに、Ⅰ期は立間以外にも鋳を持つことから鉄地金銅装あるいは革など有機質の地板を伴う（大谷2018・2025）厚みがある製品で、文様がなめくり打ちの東一本柳古墳は金銅板が厚い。これが新しくなるにつれて鍛造技術の進歩から（金）銅板を薄くしていく傾向が認められ、毛彫馬具間の先後関係を実感的に把握するうえで有効である。このほか鍍金は色味に変化が認められ、鍍金の回数や銀など他の金属との融合（合金）も推定される（註1）。

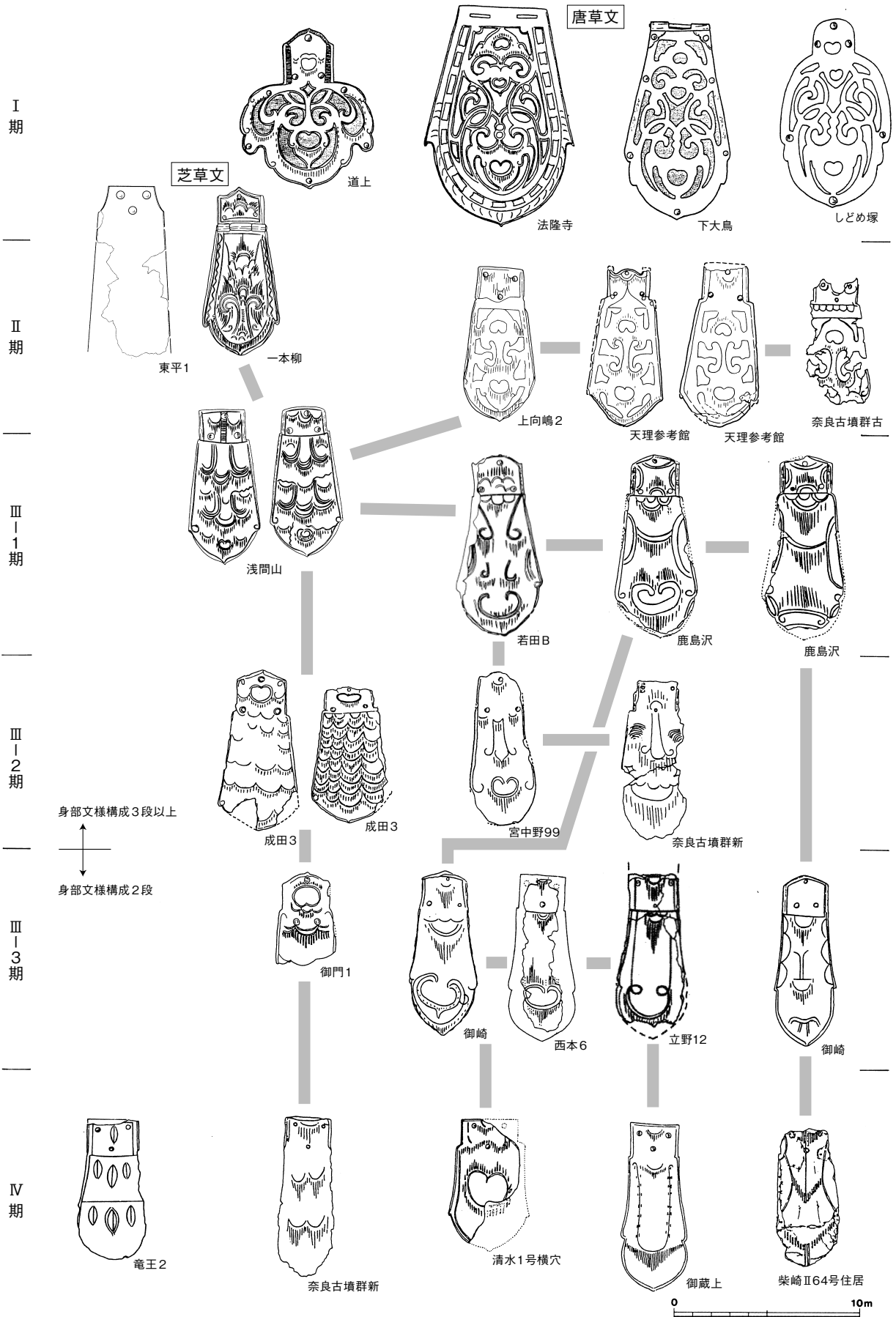
Ⅲ期の中での小期の区分は文様変化から読み通った解釈であるが、Ⅲ－2期とⅢ－3期の時期差は僅少で先後関係が誤っているものもあるだろう。Ⅱ期からⅢ期への変化は、飛鳥Ⅱ・Ⅲ並行期である7世紀中葉を前後する短期間の中での目まぐるしい文様の変化である。一方で、毛彫馬具は企画性が低い文様ではあるが、その変化の方向性をたどることはさほど難しくない。文様の正確な踏襲が求められない状況下で、工人の記憶レベルで文様が継承されたと考えられる。

列島の古墳時代の馬具は、鉄地金銅張の飾り馬具類が次第に小型・粗雑化し、終末期にはさらに製作技法が簡略化された金銅製の毛彫馬具類が出現する、という一連の流れで理解されている（内山1996）。さらに文様の企画性が低く同一古墳でも同じ文様ではない事例が見られ、これは古墳時代的な馬具の性質という指摘（富永2002）がある。確かに、馬に装着したときに毛彫馬具の文様が外見上果たしてどれほど認識されたかは心もとなく、おおよその形状や飾金具など各部位の存在が外見で認識できれば文様は製作工人や馬具所有者が理解すればよい。文様に込められた意図の製作工人や所有者の理解度が、このような文様変化を生み出したと考えられる。一方で、「上向嶋2号型」（田中新1997）とされたⅡ期の唐草文系は、一定の企画性を維持しており毛彫馬具の中では異質である。そして唐草文から芝草文への転換は、大きな流行の変化と捉えられる。

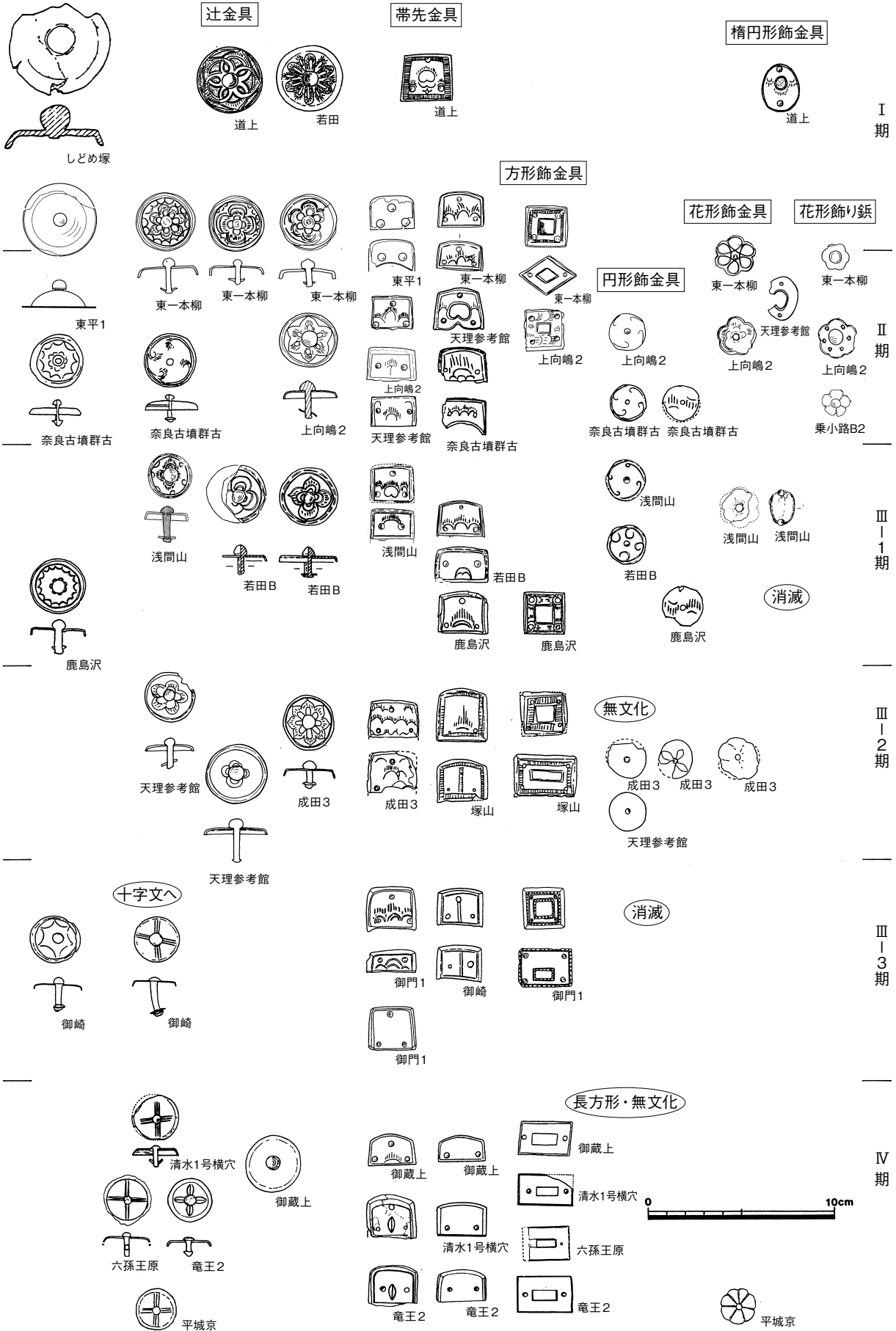
さて、上向嶋2号墳の位置づけであるが、Ⅱ期の中で位置づけられるのは先述した。出土須恵器の時期とは異なるものの、型式変遷上はⅢ期まで時期を下げることは難しいものである。Ⅱ期の上向嶋2号型馬具は、ほかに天理参考館が所蔵する伝群馬県出土馬具、奈良古墳群古とされるものがある。天理参考館例は王冠形を呈した造出部や側面の突起、さらに共伴する爪形の帯先金具に猪目文の透かしを持つのは古い要素と考えられるが、棘付花卉形杏葉の毛彫文は上向嶋2号墳例の方が細部においてⅠ期の唐草文をよくなっており、時間的な前後関係にあると捉える。また天理参考館例には複数の古墳出土品が混在しているため、古相を示しかつ馬具のセット関係が明らかな上向嶋2号墳例の資料的価値は高い。なお、杏葉の唐草文が乱れる奈良古墳群古の馬具は、花文が省略された辻金具が確実に共伴するならⅢ－1期以降に帰属時期が下がる。

（3）東三河の終末期古墳としての評価

東三河の終末期古墳を象徴するのは、馬越長火塚古墳群である。後期末の馬越長火塚古墳に続き、7世紀初頭（TK209新）の大塚南古墳、7世紀前葉（飛鳥Ⅱ）の口明塚南古墳で構成され、大塚



第 12 図 毛彫馬具の変遷 1 - 棘付花弁形杏葉 - (1 / 3)



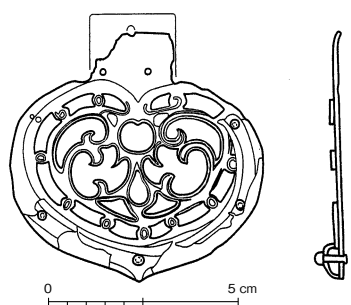
第13図 毛彫馬具の変遷2—辻金具・飾金具・飾り鉾(1/3)

南古墳は花形鏡板を含む金銅装馬具が、口明塚南古墳は毛彫馬具片が出土している。

毛彫馬具は東国偏在型の馬具と呼ばれ、中でも群馬県や甲府盆地、静岡県東部に集中して出土する傾向がある。そして2例とは言え、至近距離で毛彫馬具が出土した東三河（豊橋市北部）の特異性は注意される。東一本柳古墳が存在する長野県の佐久平では、帯先金具や飾金具などの毛彫馬具の部品が複数出土しており（富沢 2021）、毛彫馬具が局所的に集中する傾向はほかでも認められる事象である。今後、豊橋市北部の他の終末期古墳から毛彫馬具が出土する可能性は高い。

ところで、口明塚南古墳の毛彫馬具は形態的には帯先金具、もしくは棘付花弁形杏葉の造出部の可能性が高いものだが、他ではほとんど見られない毛彫りの円文もしくは蕨手文の円曲表現がある。Ⅱ期の中でも古相となる可能性を指摘しておきたい。また上向嶋2号墳の被葬者が毛彫馬具を入手したのはⅡ期なので、両古墳の被葬者は毛彫馬具を保有した国造（級首長）とその有力配下という関係で捉えられる。

豊橋市東部の乗小路B2号墳は、飛鳥Ⅱの多量の鉄製武器類を副葬する武人的な性質が強い古墳であり、花形飾り鉾や鷲目金具を伴う地位表示的な金銅装大刀を副葬するなど官僚的な性質も伺われ、上向嶋2号墳との共通点が多い。墳丘の規模（円墳、16.5 × 14 m）と石室の規模（全長 9.6 m）、さらに石室の床面が下り傾斜となる構造までも近似した独立墳である。擬似両袖形石室の平面形は奥窄まり形と胴張り形で異なるものの、7世紀中葉を前後する時期に大型の横穴式石室を築き、追葬を繰り返し、豊富な鉄製武器や金銅装製品を副葬する古墳時代的な葬送を行う両古墳は、令制三河国成立前の東三河の地域性を示すものとして東海地方では出色である。



なお豊橋市の三河湾海浜部にある牟呂王塚古墳（前方後円墳、TK209 新）からは鉄製の地板を伴わない金銅製の心葉形杏葉（第14図）が出土しているが、立間は3鉾留めで、本体の透し彫り唐草文は法隆寺系の仏教意匠である円文を配置し、猪目透がモチーフの中核となる。そして透し彫りに沿って線刻があり、線の太さからなめくり打ちによると思われる。つまり、牟呂王塚古墳の馬具は毛彫馬具のⅠ期を並行する時期に、毛彫馬具と同様の背景で製作された最後の心葉形杏葉を含む。さらに本体の唐草文が異なり、立間の

第14図 牟呂王塚古墳出土杏葉 鉾数が2鉾で猪目透しを持つ別形態の心葉形杏葉を含む点も、同一古墳であっても文様意匠が異なる毛彫馬具の性質と類似する。これは、後期末葉の馬越長火塚古墳以降、東三河では一貫して最新の金銅装馬具がもたらされたことを示している。

以上を総轄すると、上向嶋2号墳は列島の毛彫馬具の中核をなす金銅製馬具を副葬し、被葬者は東三河では令制国成立直前の穂国造配下で地域支配を担う、官僚的な性質を備えた有力構成員であったと推定される。さらに東三河では、後期後葉から終末期にかけて王権との直接的な関係を金銅装製品で表現する体制が維持されており、それは東国的な性質でもある。その歴史的な背景から、上向嶋2号墳は東三河の終末期古墳を象徴する諸特徴を備えた重要古墳と評価できる。

謝辞 本稿を作成するにあたり、文献収集や資料調査、執筆について下記の個人・諸機関からご協力並びにご教示をいただきました。ここに記して感謝いたします。

一之瀬敬一 大谷宏治 黒田篤史 早野浩二 藤原郁代 佐久市教育委員会 千葉県立中央博物館 天理大学附属天理参考館 名古屋大学文学部 山梨県立考古博物館

（豊橋市文化財センター所長）

註

1 筆者の資料調査での観察による。(金)銅板の厚みはあくまで筆者の触感ではあるが、東一本柳古墳→上向嶋2号墳・天理参考館(王冠形)→浅間山古墳・天理参考館(方頭形)→竜王2号墳の順に薄くなる。これは各古墳の資料調査で上向嶋2号墳の資料を持参し、現地で直接触れながら確認したものである。

参考文献

- 岩原 剛 2023 「鉄鍬の評価」『豊橋市寺西1号墳の研究(2) 論考篇』愛知大学総合郷土研究所
- 岩原 剛 2024 「馬越長火塚古墳群の横穴式石室とその評価」『馬越長火塚古墳群(Ⅱ)』豊橋市教育委員会
- 内山敏行 1996 「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- 大谷宏治 2018 「東平1号墳の馬具と刀剣から見た被葬者像」『伝法東平第1号墳』富士市教育委員会
- 大谷宏治 2025 「透十字文心葉形鏡板付轡及び車輪文楕円形・心葉形鏡板付轡並びに横長心葉形鏡板付轡・棘付花卉形杏葉の展開」『後期古墳研究の現状と課題Ⅲ～古墳時代後期の馬具再検討～』中国四国前方後円墳研究会 第28回研究集会実行委員会
- 岡安光彦 1984 「いわゆる「素環の轡」について－環状鏡板付轡の型式学的分析と編年－」『日本古代文化研究』第2号 PHALANX－古墳文化研究会－
- 岡安光彦 1985 「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』第2号 PHALANX－古墳文化研究会－
- 岡安光彦 1990 「東北地方の群集墳造営年代をめぐる諸問題」『日本考古学協会第56回総会研究発表要旨』
- 尾上元規 2025 「鐙」『後期古墳研究の現状と課題Ⅲ－古墳時代後期の馬具再検討－』中国四国前方後円墳研究会
- 斎藤 弘 1986 「古墳時代の壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 PHALANX－古墳文化研究会－
- 白井久美子 2002 「3 出土遺物について」『千葉県史編さん資料 印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』第1分冊 千葉県
- 白井久美子 2016 『最後の前方後円墳 龍角寺浅間山古墳』新泉社
- 高松 由 2011 「棘付花卉形杏葉の変遷と彫金技術－7世紀における新来技術の導入と定着－」『待兼山論叢』第45号史学篇 大阪大学文学部
- 田中新史 1980 「東国終末期古墳出土の馬具－年代と系譜の検討－」『古代深叢』Ⅰ 早稲田大学出版部
- 田中新史 1997 「道上型毛彫馬具の出現と展開」『西本6号遺跡発掘調査報告書2』(財)東広島市教育文化振興事業団
- 田中広昭 1990 「律令時代の身分表象(Ⅰ)」『土曜考古』15
- 富沢一明 2021 「佐久市東一本柳古墳出土の金銅製馬具について」『信濃』第73巻第12号 信濃史学会
- 富永里菜 2002 「馬具の帯金具」『銚帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
- 濱岡大輔 2003 「花卉形杏葉について」『上5号墳』奈良県立橿原考古学研究所
- 三河考古刊行会 1994 『東三河の横穴式石室 資料編』
- 宮代栄一 1996 「古墳時代の金属装鞍の研究－鉄地金銅装鞍を中心に－」『日本考古学』第3号 日本考古学協会
- 森田安彦 2005 「毛彫施文の金銅製棘花卉形杏葉の編年的位置付けについて」『立野古墳群発掘調査報告書』江南町教育委員会

●挿図に使用した出土遺物の図は報告書及び各論考掲載のものを援用したが、紙幅の都合で出典を割愛した。ご寛恕を請う次第である。

